みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Maya Indian or Yucatec Peasant : an alternative approach to ethnicity beyond Indian Non-Indian opposition

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5548

〈論文〉

マヤ・インディオ あるいは ユカテコ・農民: インディオ—非インディオ関係を越えて

鈴木　紀
(東京大学大学院)

SUMMARY

This is an attempt to challenge conventional images of the Maya Indians as an ethnic group, by ethnographic description of various ethnic identities that are held by people of a small peasant community in the east of Yucatan state, Mexico.

Some anthropologists, so far, tried ethnicity study in Yucatan and the common tendency of thier analytic framework lies in reductionism to a binary opposition between a pair of culturally distinct groups. Depending on each of the investigators, the pair is called with different terms such as, "the Maya and the Spaniard", "Mestizo and Catrin", "Yucatecan and *Dzul*", "*Mesewal* subsystem and Regional subsystem", and so on. In spite of the variety of names, all of these pairs are derived from an original binary opposition, that is "Indian and Non-indian." According to this view, the village people of this study may be regarded not only as the Mayas because they speak Maya but as Indians because Maya is one of the 56 indigenous languages officially recognized in Mexico. In short, they are simply categorized as the Maya Indians.

But, nowadays, there are a lot of factors that may influence ethnicity of the Yucatecans; each community is getting less isolate by extension of road communication, public education is diffused all over the region, urban life style is permeated into rural areas and increasing economic dependence on a Caribian resort city, Cancun is remarkable.

In order to analyze dynamic nature of ethnicity, the villagers' regional and cultural identities are examineed. 1) Mestizo identity has lost importance as an ethnic identity. 2) Maya identity is declining. 3) *Masewal* identity is kept and extended to peasants of other communities and urban wage laborers. 4) Villager identity is activated in the context of pursuit of resouces. 5) Yucatecan identity is manifested as a cultural unity. 6) Indian identity is nothing but a forced identity.

Then several hypotheses are presented as follows: the Yucatecans by themselves form a single ethnic group and *Masewals* constitute a sub-ethnic group within the Yucatecans. A small peasant community can be regarded as a micro ethnic group. The Mayas show tendency to become a muted ethnic group. Finally the Indians as an ethnic group are anyhow fictive. So it is strongly recomended to discuss the ethnicity in Yucatan not in terms of the "Indian-Non Indan" opposition, but with reference to the various ethnic identities that the "Indians" have.

金曜日の正午過ぎ，色白で長身の男が汗をふきふき小学校の門を出た。もう授業は終わっていて子供達は三々五々家路についた後であり，ガランとした教室には人気がない。彼は村の広場へ続く石ころだらけの道を足早に歩いていく。6月には燃えるような赤い花をつけるフランボヤンの大樹の下に，木洩れ日を反射して銀色に輝く一台のピックアップ・トラックが停まっており，先程からかけっぱなしのエンジン音があたり一面にこだま

している。荷台に置かれた木のベンチには数人の男達が座っていて三日前の新聞を回し読みしながら談笑している。そのうちの一人が歩いてくる男をみつけて“!Vamonos!”と声をかけた。

トラックの傍らには三人の女が立っていて静かにおしゃべりをしている。一人は裾のほころびた黄色のドレス，他の二人は白い貫頭着姿だが，いずれも裸足であった。三人はお昼のトルティーヤのためのゆでたてのトウモロコシを小さなバケツにいれて腕に抱えている。粉ひき小屋はすぐ近くだが，他の女達が終わるまで少し待たなければならない。

男は道の脇の一軒の家に入って一週間分の着替えのつまった鞄を抱えて出てくると，そそくさとトラックに飛び乗った。彼は，久しぶりにバヤドリの町で冷たいビールを飲んでいこうと同僚に提案し，一番色の黒い女に向かってトラックの上から軽く手を振った。

1 序

これはメキシコ，ユカタン (Yucatán) 州，チュマッシュ (Chemax) ムニシピオ内S村における日常的な光景の一駒である。1980年度のセンサス (表

表1 ユカタン地方の言語状況(1980年)

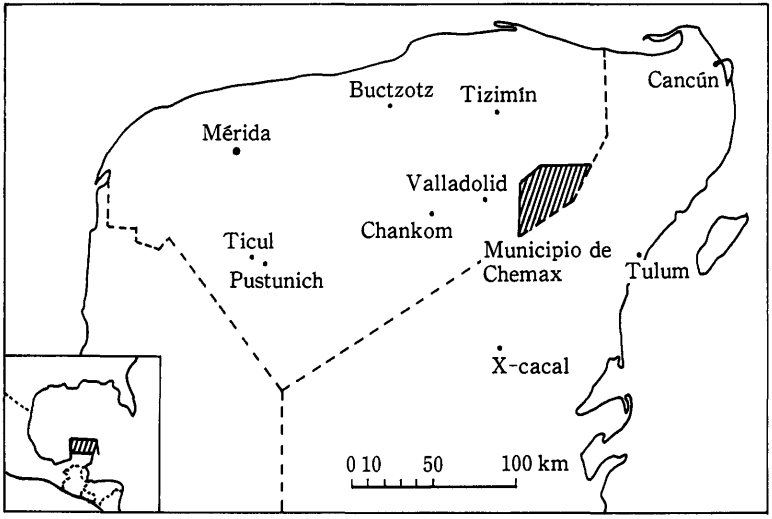
州	総人口	5才以上人口	スペイン語 monolingual	マヤ語人口	マヤ語 スペイン語 bilingual	マヤ語 monolingual	非特定
ユカタン	1,063,733	923,887	433,929	480,422	391,315	68,499	20,608
カンペチェ	420,553	358,460	281,370	69,373	58,928	6,133	4,312
キンタナ・ロー	225,985	188,107	105,335	80,213	64,547	12,328	3,338
3州合計	1,710,271	1,470,454	820,634	630,012	514,790	86,960	28,258

スペイン語 monolingual，マヤ語人口，マヤ語スペイン語 bilingual，マヤ語 mololingual，非特定者はいずれも5才以上。Secretaría de Programación y Presupuesto 1982a, 1982b, 1983 より作成。

1参照)によれば，ユカタン州には約48万人，カンペチェ(Campeche)州，キンタナ・ロー(Quintana Roo)州も含めれば約63万人ものマヤ語[1]人口が数えられている。S村の住民も全員マヤ語話者であり，その一部をなす。

これらの人々に対して言語的規準でマヤという民族的カテゴリーをひとまず設定することが可能である。そして言語を共有している以上，これらの人々の間に共通の文化が存在すると考えることは自然である。また，マヤ語がメキシコで公認されている56のインディヘナ言語の一つであるために，彼等をインディヘナ住民と認識し，そこになんらかのインディオ性を容易に想定しがちである。つまりマヤ・インディオという明確な民族集団が伝統的な文化を共有しつつユカタン地方[2]に存在すると一般に考えられやすい。しかしこうした固定観念はどこまで現実を説明できるのであろうか。現在のユカタン地方には道路網の拡大による各集落の孤立性の減少，教育の普及，電化を契機とする都市的生活の浸透，そしてカリブ海岸の観

図1　ユカタン地方



光都市カンクン (Cancún) への経済的依存等，文化変化を促す要因にあふれている。

こうした状況をふまえて，本論文ではS村でのフィールドワーク[3]で得られた資料に基づき，ユカタン地方のエスニシティを村人自身の主観的な視点から分析する。その際には従来のユカタン・マヤ民族誌研究の方法論的限界を意識し，その成果を批判的に検討することを明記しておきたい。

2 ユカタン地方におけるエスニシティ研究

近年のメソアメリカ研究の一つの総括である『征服の遺産：30年の後に』の中で，ホーキンス (J. Hawkins) はレッドフィールド (R. Redfield) に端を発するメソアメリカ地域のエスニシティ研究の軌跡を回顧している[4]。彼の関心は彼自身のフィールドであるグアテマラ高地を中心とするが，その分類はユカタン地域の研究にも適用可能である。そこでここではホーキンスの考察に依拠しつつ，そこから漏れているものを補足して，それぞれのアプローチの特色と問題点を指摘してゆきたい。

第一にレッドフィールド自身の「チャンコム (Chankom)[5]」研究とそれを基礎に展開した「ユカタン民俗文化[6]」，チャンコムの再調査である「進歩を選んだ村[7]」を挙げることができる。ホーキンスは，レッドフィールドにとっての文化とは一つの集団を際立たせる主として物質的，行動的な特徴の集合体という性格が強いという[8]。また，一揃いの文化特徴を提示する集団として自己充足的な集落という単位が仮定されたため，レッドフィールドの研究には集落限定性が顕著であるという[9]。確かにレッドフィールドは詳細な文化特徴の記述を通じてチャンコムの集落文化を把握した後，これをユカタン地方の他の三地点の集落文化と比較して，「ユカタンにはスペイン，近代，都市的なるものが，マヤ，古代，未開的なるとのへと移行する社会的傾斜がある[10]」と考えた。さらにチャンコムに導入された都市的文化特徴に注目することからチャンコムの進歩を論じている。つまり，ス

ペイン起源の文化の伝播にもかかわらず土着文化をより多く残している集落がよりマヤ的であるとみなしているのであり，これは研究者が注目した特定文化特徴によって集落文化を規定していくという意味できわめて客観的なマヤ・エスニシティへのアプローチであるといえる。

第二のアプローチは，ホーキンスの分類で「複数社会 (plural society)」論といわれるものである。これは，「親族制度，宗教システム，コスモロジー・システム，自発的結社，育児習慣等において独自性をもつ諸集団が一組の政治経済的関係で繋がれているような社会[11]」をさす。つまり異なる文化を持つ複数社会集団が，地域あるいは国家という枠組みの中で互いに関係を保ちながら存在するという考え方であり，これによりインディヘナの多様な集落諸社会に対するラディーノ (ladino) の均質な社会というモデルが浮かび上がる。これは集落限定的であったレッドフィールドのアプローチよりははるかに広い視野を提示している。しかし，各社会の文化規定はレッドフィールドから受け継いだ物質的，行動的な文化特徴を基準としていることに変化はない。ユカタン地方ではプレス (I. Press) のプストゥニッチ (Pustunich) 研究[12] (特に第6章「階級とアイデンティティ」)，トンプソン (R. Thompson) のティクル (Ticul) 研究[13]等が相当する。これらの研究では，民族衣装を着用する者，メスティソ (mestizo) と洋服を着用する者，カトリン (catrin) という図式で異なる文化をもつ集団が区別され，集落の中での両集団の関係が分析されている。この他，同傾向の研究としてバルトロメ (M. Bartolomé) とバラバス (A. Barabas) による『マヤ・レジスタンス[14]』が挙げられる。そこでは，キンタナ・ロー州中部，19世紀カースト戦争に起源をもつインディヘナ住民の社会がマセワルサブシステム (subsistema macehual) として規定される。他方これを取り囲むキンタナ・ロー州地域社会は地域的サブシステム (subsistema regional) として規定され，前者の後者への統合のプロセスが分析されている。

ホーキンスは言及していないが，第三のアプローチとしてブリッカー (V.Bricker) による構造主義的方法[15]を挙げることができる。彼女はユカタ

ン，チアパス，グアテマラ三地域の口頭伝承・儀礼パフォーマンス等の比較から「民族紛争 (ethnic conflict)」という構造を抽出している。ユカタン地方に関しては「ツル (*dzul*) という言葉は『優勢な異民族集団の成員』という時間を越えた構造的意味をもっている[16]」とし，先スペイン時代より繰り返されたユカタン地方への様々な侵入者をツルという民族集団として説明している。この分析ではツルは特定の文化特徴をもつ集団として規定されてはいないが，チアパス，グアテマラにおけるラディーノのユカタン版として扱われ，ユカタン土着民とツルの関係をインディオ：ラディーノ関係のパラレルとして「紛争」という常識的かつ一面的な関係に収束させてしまっている。このような態度はキンタナ・ロー州中部で口頭伝承を採集しカースト戦争の連続性を主張したバーンズ (A. Burns)[17]にも共通する。

四番目のアプローチはホーキンス自身の意味論的方法[18]である。彼によればグアテマラのエスニシティは，植民者としてのラディーノと被植民者としてのインディオの二つのステイタスが正反対のものとして対立することで意味が生起する単一の文化システムとして分析できるという。したがってレッドフィールド以来の行動主義的物質論的な文化規定においてインディオとラディノが異文化として分断されてきたことに強い批判が向けられている。彼のアプローチは初代の『征服の遺産[19]』以後の人類学理論の発展を反映し，そのパースペクティブにおいては，メソアメリカのみならずスペイン人の植民したペルーやフィリピン，イギリス人の植民したジャマイカ等，広範な地域への適用可能性をもっている。しかしユカタン地方においてはホーキンスの「反対像」アプローチに対応する研究はみられず，また，このアプローチが必ずしもユカタン地方のエスニシティ分析に適合しないことは本論文で示される。

さて以上の四つの方法論に共通する特徴はインディオ：非インディオ関係を研究者が無批判的に容認し，調査結果をこの二極化構造に準拠して考察しようとする還元主義である。名称は研究者によって，マヤ：スペイン，メスティソ：カトリン，ユカタン：ツル，マセワルサブシステム：地域的

サブシステムと異なるが，二つの文化の対立としてエスニシティをとらえようとする姿勢はすべてに共通である。レッドフィールドはそれでも，文化特徴を基準とした連続体 (continuum) という発想をもっていたが，近年の研究者はむしろ，相異なる二つの対照的文化という認識を強めている。ホーキンスはこの点では対立関係そのものが一つの文化システムを形成するという立場をとるが，発想としてのインディオ：非インディオ二極関係から少しも離れていない。こうした二極関係に「紛争」という概念が賦与される場合にはその還元主義は一層顕著になる。

このような二極化構造の認識は，スペイン的伝統に対してアメリカ大陸の土着的伝統を保持している民族集団としてインディオをとらえる一般通念から生じているのであり，研究の結果をインディオ：非インディオ関係に還元することにより，この通念は再び強化されることになる。この意味で現代の人類学者は征服当初のスペイン人植民者とインディオ認識において何ら変わることがないとしたフリードランダー (J. Friedlander) の指摘[20]は的を射ている。エスニシティという可変性の強い現象を柔軟にとらえていくためには，このような硬直化したインディオ：非インディオ二極構造から脱する必要がある。そのためには研究者が特定の人間をインディオであると同定する以前に，その人々がどのようにして「自分達」を表現しているかに耳を傾けなければならない。いい換えればこれは主観的なエスニック・アイデンティティの掘り起こし作業ということになる。本論文で採用する方法論は，バース (F. Barth) によって提唱された「帰属意識」を重視するエスニシティ研究[21]の流れをくむものとなる。その手初めとして次節ではＳ村の人々が抱く様々なアイデンティティを記述していくことにしよう。

3 Ｓ村民のアイデンティティ

個人は生活の様々な局面において多様なアイデンティティをもつことが

できる。したがって一人の人間のアイデンティティを余すところなくすべて記述することは不可能に違いない。ここで問題とするのはエスニック・アイデンティティであり，これは特定の文化の中に生まれた個人が一人前の成人として成長していく過程，すなわち文化化の過程で獲得される，その文化カテゴリーに対するアイデンティティである。しかし個人は必ずしも自分が属する抽象的な文化カテゴリーを把握しているわけではなく，特定の文化特徴をシンボルとして自文化への帰属を確認する。このような文化特徴として例えばバースは衣装，言語，家の形，一般的な生活様式，基本的な価値指向を挙げ[22]，デ・ボス (G. De Vos) は人種的特徴，領土，経済的基盤，宗教，審美形式 (味覚，舞踊，衣装，身体美の基準)，言語を挙げている[23]。本節ではこのような，エスニック・アイデンティティとなる可能性をもつ12のアイデンティティを提示する。1)～5) は特に領土，領域に関するもの，6)～11) は文化特徴に関するもの，そして12) ではインディオ・アイデンティティ自体を扱う。

ところで個人は日常生活の中で常に同じアイデンティティを絶え間なく保持し続けているわけではない。ある特定のアイデンティティが顕在化するのは，多くの場合そのアイデンティティをもたない他者の存在が意識された時である。したがってある一つのアイデンティティは無意識の状態，意識化された状態，何らかの目的のために活性化された状態，さらに他者によって強制された状態があることを念頭におかなければならない。例えば調査者があるアイデンティティに関して質問をすると，インフォーマントはその質問を耳にした瞬間にわかにそのアイデンティティを活性化させて答えるかもしれない。究極的には異文化から来た人類学者がフィールドに居住していること自体が住民のエスニック・アイデンティティに何らかの影響を及ぼしていると考えられる。仮に調査者がインフォーマントと同文化の出身であったとしても，調査行為自体がインフォーマントにとっての非日常性を意味するので，この問題から何人も完全に逃れることはできない。こうした調査上のバイアスを少しでも軽減するために以下の考察

は調査者の質問に対する回答ではなく，フィールドワークの折々にS村民自身が自発的に話しかけてきた言葉，および彼等同士で話し合っていた意見を基にしている。そしてそれがどのような状況で語られていたかという点に注意しながら以下に分析を進めていきたい。

1) 村人 (*etkahal*)[24] S村民は村の住人のことを *etkahal* という言葉で表現する。S村はトウモロコシ畑と森林に囲まれた人口913人 (1987年3月) の集落である。空間的には18世紀に建設されたと推定される教会を中心に東西約1 Km，南北約800 mにわたって住居の集中がみられる。村内の中心部と周辺部の明確な区分は意識されておらず地区 (barrio) の分化もみられない[25]。教会前の広場に面して cuartel とよばれる村役場があり，そのテラスでは必要に応じて村民全員参加が原則の集会 (asamblea) が開かれる。教育施設としては村外れに小学校と近隣の児童のための寄宿舎，村の中央に幼稚園が存在する。役場に隣接してコナスポ (CONASUPO : Compañía Nacional de Subsistencias Populares) の売店と，INI (Instituto Nacional Indigenista) の巡回医療団が週に一度使用する診療所がある。役場の裏庭では時々チェマッシュの商人によって有料映画会が催される。教会では有志が週に三度ほどロサリオを行う他，月に一度はチェマッシュから来村する神父がミサを主催する。このようにS村はその住民および近隣小集落の住民の日常生活において一つの公共空間を形成しているということができる。

しかしS村の成員を決定する最も重要な要素はS村のエヒードにおける耕作権である。1987年8月には約220人の成人男子および青少年がエヒードでの耕作に従事しており，各人は原則として耕作権と引き換えに村の公共事業 (fagina) への参加，村役場の警護 (guardia) の義務を負う。S村のエヒードは1935年に政府から認定された4575 haからなり当時のエヒード成員は58人，したがって当初は一人あたり80 ha弱の充分な広さがあったと思われる。農作業は非集約的な天水移動焼畑耕作によ

るトウモロコシ栽培であり，基本的には家族労働で作業可能なため各世帯の経済的自律性は強い。しかし1960年代初めに一部の村人が粗放的牧畜をエヒード内で始めたことから畜害が深刻化し，牛の所有者と非所有者との間で争いが起こった。当時の村長 (comisario municipal) の裁量でエヒード内の放牧は禁止され問題の解決をみたが[26]，これを契機に村人の間で共同資源としてのエヒードという認識が強まったと思われる。近年は村の人口増加により誰もがエヒードの土地不足を感じている。1987年の一人あたり平均耕作面積は約4 haであり，これを220人分880 haとしてエヒード面積を割ってみると5倍強となる。焼畑耕作には充分な休閑が必要で，村人は理想的には10年以上，少なくとも7～8年は土地を休ませたいと考えており，現状ではまだ充分に地力の回復していない土地を化学肥料に頼りながら再耕作せざるをえなくなっている。

こうした状況の中1987年7月26日の村民集会で生じた問題は成員権を巡る村人の考え方を如実に示している。この日，数日前に友人を頼って村にやって来た男と，村の女と結婚して既に半年ほど村に居住していた男が，S村のエヒード耕作権を村人に申請した。彼等は同じユカタン州の出身で，特に後者は村のカーニバルへの参加と農作業の手伝い等を通して村人との親睦を深めていた。彼等は今後はファヒーナの義務をきちんと果たすことを約束し「我々は同じユカテコ (Yucateco)，同じ農民ですからどうか宜しく」というロジックをマヤ語で主張した。これに対し大半の村人は暫し無言であったが，一人がエヒードの土地不足を理由に強硬な反論をし，それにつられて集会参加者は一気に受け入れ反対を決議した。

現在S村では多くの農村開発計画が実行されている。特に1973年以来のINIによる灌漑農園計画は，紆余曲折をへながらもその経済的効用が次第に村人に認識されはじめ，1987年には三つの農園で村内153世帯の内の約6割にあたる91世帯が換金作物のトマト，スイカ等の栽培に従事している。このような計画は通常バヤドリ (Valladolid) にあるINIの

調整センター (centro coordinador) から提案がなされ，INI との協力を決議した集落に対して INI がその実施を決定するという手続きがとられる。このため村人は，仮にそれが村人の一部しか利さない計画であっても村をあげて賛同することが望ましいことを知っている。INI に限らず，ユカタン州政府や水資源農業省の新計画を議論する村民集会では，しばしばS村が一つであり内部に分裂があってはならないことが確認される。

要約すると *etkahal* というアイデンティティは基本的には生活空間としてのS村への居住によって得られるのであるが，資源の維持，獲得というコンテクストにおいて強化されてくると考えることができる。

2) 東方者 (orientes)　S村には有志による野球チームがあり，そのチーム名がオリエンテスである。この名は直接にはS村がユカタン州東部にあるためと説明されるが，彼等の東部認識には宗教的なシンボルが関係している。S村から直線距離で約 40 km のティシミン (Tizimín) の町は東方の三賢士 (Tres Reyes Magos) を守護聖人とする巡礼センターとしてユカタン地方で知られている。毎年1月6日前後にはS村民の多くの者がトラックに乗って巡礼にでかける。村人にとってこの地方が東方なのは近くに三賢士が奉られているためと考えることもできる[27]。いずれにしてもこのアイデンティティは，ユニフォームにはっきりとオリエンテスと書かれているにもかかわらず，究めて限定的で日常言及されることは稀である。

3) ユカテコ (Yucateco)　S村民はしばしば自分達のことをユカテコという。ユカテコとは普通にはユカタン州民のことであり，広義にはカンペチェ，キンタナ・ロー両州，すなわちユタカン地方の住民という意味で用いられることもある。

村人は当初人類学者の仕事を理解せず当惑気味に人類学者を観察していたが，次第にその仕事を承知すると，中にはすすんで自分の仕事や暮らしぶりを見せようとする者も現れた。そんな時彼等は「我々ユカテコ

はこのように仕事をするのだ」「これがユカタンの習慣だ」と説明する。

1987年5月3日，オリエンテスはキンタナ・ロー州トゥルム (Tulum) のチームを迎えて野球の試合を行った。三週間前，トゥルムに招かれた折にもてなされた魚料理の返礼として，試合後の交歓会で用意された料理はレジェノ・ネグロ (relleno negro)[28]であった。これはS村では村祭，結婚式，子供の洗礼，故人の命日等，多くの客をもてなす時に好んで作られる料理である。この時チームのリーダーは，遠来のトゥルムの友人達に「ユカタン料理」をもてなすのだと説明した。

1987年4月17日，聖木曜日のその日，S村では午後1時半からキリストの受難劇が演じられる予定であった。1時半に劇の始まる村外れに集まっていたのは，聖週間の間メリダ (Mérida) の神学校から派遣された学生の他は村人が二人だけであった。学生はマヤ語を話せず，人類学者に向かってスペイン語で「我々ユカテコは時間に不正確だから困ったものだ。チェマッシュの神父様だってよくミサの時間に遅れるし」と語った。これを聞いた一人の村人はマヤ語で「村民集会は4時から始まるというけれど実際に皆が集まるのはいつも6時過ぎだ」といってもう一人の村人に同意を求めた。この例で，学生は時間通りに集まらない村人と神父，そして日頃の自分自身を反省しながら日本人の人類学者に対しユカテコという言葉を使った。これは日本人が非ユカテコである以上自然な発想だと思われる[29]。そしてそれをスペイン語で理解した村人は，学生の指摘に対応する例を村人の習慣に求めてマヤ語で言葉を続けた。つまり時間に不正確という性格はユカテコという言葉の下で学生と村人とに共有されていると考えることができる。

以上の例からユカテコ・アイデンティティは，非ユカタン州民に対して自分達の生活習慣や行動様式の特徴を意識して顕在化するといえ，こうした特徴の共通性はスペイン語話者，マヤ語話者の区別なく広く認識されていると見通しをつけることができる。

4) メキシコ人 (Mexicano)　S村民がメキシコ人を意識するのは，彼

等がメキシコの国家機構と直接に対面する時に限られる。例えば選挙登録証の確認のために開催された村民集会で一人の村人は「これはメキシコ人ならば誰でももっていなければならない」と説明した。

5) 西洋人 (occidental)　西洋人というアイデンティティを明確にしたのはS村の小学校長 (S村出身) 一人であり，他のアイデンティティよりも限定的である。調査への協力を依頼するため挨拶に来た人類学者に対して彼が語った言葉は「東洋人のあなたと西洋人の我々が文化交流できることは誠に喜ばしい」というものだった。

6) メスティソ (mestizo)：カトリン (catrin)　ユカタン地方では一般に民族衣装着用者をメスティソあるいはメスティサ (mestiza) と呼び[30]，洋服着用者をカトリンあるいはカトリーナ (catrina) と呼ぶ。ユカタン地方の民族衣装とは，男性の場合，丈の短い白ズボンと白シャツにデランタル (delantal) という前掛をし，足には踵のないサンダル (alpargata) 頭にはシュロの繊維で編んだ帽子をかぶる。女性の場合はペチィコートの上に白い貫頭着ウィピル (*wipil*) を着用，頭にはレボソをかぶる。貫頭着の襟元と膝上にはあざやかな花模様の刺繍がほどこされている。

S村の男性で典型的な民族衣装の着用者は一人の老人のみ，デランタルを時々巻いている者は他に二人であり，大多数の者は既成の開襟シャツと長ズボンに野球帽 (gorra) というスタイルである。履物はサンダル，作業靴，運動靴，革靴と多様であり，一人が二種以上を所有していることも珍しくない。このため男性に関してメスティソやカトリンという言葉は現在ほとんど使用されず，その識別自体も意味を失っている。

女性の場合はウィピルと洋服の差によってメスティサとカトリン (S村ではカトリナという女性形は余り使用されない) という識別が頻繁になされる。年配の者ほどどちらか一方の服を常用する傾向があり，メスティサの方がカトリンより多い。若年者，特に十代の少女達の場合はウィピルと洋服の双方を所有し，その日の気分で着用し分けている者が多い。

洋服が好まれる理由は経済性にある。既成の洋服の価格は，ウィピル製作のための生地と刺繍糸代とほぼ同じであるが，ウィピル製作には当然手間がかかる。既成のウィピルは刺繍の程度にもよるが，一般に洋服よりも高価である。それでもウィピルが好まれる理由は，その製作自体が女性の娯楽になるためであろう。花模様のデザインと配色に各人の創意工夫が活かされる。

ユカタンの地域舞踊ハラーナ (jarana) が村祭等で踊られる時にはメスティソ姿がふさわしいと考える者が多い。もちろん実際には洋服姿で踊る者も多く，洋服着用を理由に参加を拒まれることはない。それはちょうど日本人が盆踊りには浴衣がいいと考えるのに似ている。しかし浴衣が和服のバリエーションであり日本文化のシンボルというほどには，ウィピルは彼等の文化的シンボルという意味をもたない。それは村人の多くが日本にはメスティサとカトリンのどちらが多いかと尋ねることからも明らかであろう。

このように現在のＳ村にはウィピル着用者と洋服着用者が共存しているのであるが，両者の間に生活様式の差は認められない。「洋服姿では農作業ができない，お嫁のもらい手がない[31]」というチャンコムの人々の杞憂はもはやＳ村にはみられない。実際にカトリン女性でも薪を拾いに森へ入り，灌漑農園で畑仕事を手伝う。つまりメスティサ，カトリンという識別はあくまでも女性の衣装の状態についてなされるのであり，その着用者が何らかの文化的背景を帯びているとは認識されていない。いい換えれば，メスティソ文化，カトリン文化のシンボルとしてウィルピと洋服があると考えることはできないのである。

表2 Ｓ村民の姓分類(1987年３月)

性　別	父姓：スペイン 母姓：スペイン	父姓：スペイン 母姓：マヤ	父姓：マヤ 母姓：スペイン	父姓：マヤ 母姓：マヤ	計
男　性	22(4.6%)	82(17.1%)	54(11.3%)	321(67.0%)	479
女　性	19(4.4%)	60(13.8%)	42(9.7%)	313(72.1%)	434
計	41(4.5%)	142(15.6%)	96(10.5%)	634(69.4%)	913

7) 姓　S村民は自分の姓として父姓と母姓の二姓を使用しており，全体でマヤ姓51，スペイン姓18が数えられる。表2はS村民の姓による分類である。全体の30%以上が父姓もしくは母姓のいずれか，あるいは両方にスペイン姓をもっている点に注意が必要である。一般に自分の姓の起源に対する関心は薄く，マヤ姓の者，スペイン姓の者を区別する言葉も知られていない。

しかし村人が一旦村の外へ出ると，マヤ姓よりもスペイン姓に価値を認める傾向がある。カンクン労働の経験豊富な青年は，自分のサインの練習のために人類学者から紙とペンを借りた。彼の姓は父姓がマヤ，母姓がスペインであったが，果して彼のサインは名前の頭文字と母姓ばかりであった。

8) 肌の色　S村民は総じて色が黒いが中には非常に白い肌の者もいる。姓の区別同様，肌の色を基準に人間を分類することは少ない。しかしスペイン姓への価値賦与と同様，村内でも白い肌に憧れる傾向がある。ある村人は自分の妻がそれほど色黒でないと自慢する。また，写真を撮ってもらう時やハラーナの舞踏会に参加する時に白粉で厚く化粧をする女性もあり，これなどは白い肌への変身願望かもしれない[32]。

以上6)～8)，すなわち衣服，姓，肌の色に共通する点は，これらがある個人の状態もしくは属性だけを限定的に形容する時に用いられる基準であり，そうした性質をもつ人々の集団はほとんど意識されていない。またこれらの基準はあくまでも第三者に対して用いられるのであり，自分の属性として語られることは稀である。この意味でS村民が村の中で生活している限り，衣服，姓，肌の色に関して強いアイデンティティをもつとは考えられない。

9) マヤ語話者 (mayero)　マヤという言葉は必ずスペイン語 (español) に対するマヤ語，すなわち言語の種類として用いられ，マヤ語

を話す人という意味ではマエロ (mayero) という言葉が使われる。スペイン語とマヤ語のバイリンガル者の場合もマヤ語を話す限りにおいてマエロである。

村人は全員マヤ語話者であるため彼等同士ではことさらマエロという言葉は聞かれないが，外部から来村する者に対してはその人物がマエロであるか否かは大きな関心を呼ぶ。村を訪れるマエロとしては近隣集落からの農民の他，小学校の教師，行商人，農村貸付銀行 (Banrual : Banco de Crédito Rural Peninsular) の検査官，INI の養蜂技師，巡回医療団の看護婦，チェマッシュの神父等が知られている。一方村外では，村人が日用品の購入や農作物の出荷で関係するチェマッシュやバヤドリの商人達はたいていバイリンガルであるため，彼等もマエロとみなされる。また，弁護士のマエロを知っているという者もいる。村人はそれでもマエロの大半は自分達のような農民だと考えているが，このようにマエロの中には様々な専門職に従事している者が知られており，村人の認識の中でマエロであることと特定の生活様式をもつことがもはや単純に結び付かなくなっている。

10) カトリック教徒 (católico)　S村民は全員カトリック教徒，カトリコである。カトリコ意識はプロテスタント系諸教会の信者，エルマーノス (hermanos) に対して顕在化する。例えばS村に内部分裂がないことを強調する時「我々は全員カトリコだ」と言われる。これは村人が，ムニシピオのカベセーラ，チェツマッシュでは多くのプロテスタント系教会が活動し，各人がまちまちの信仰生活をおくっているためもめ事が絶えないと考えていることを背景としている。しかし村人の意見ではカトリコもエルマーノスも同じ神を信じている点で相違はなく，祈り方が少し違うだけであるとされ，エルマーノスが直接には兄弟という意味であるように，村人は現在カトリコとエルマーノスの区別に大きな意味を見出していない。彼等にとって重要なのは宗教の種類ではなく全員が同じ宗教を信じるということなのである。

11) マセワル (*masewal*)　S村民の経済生活は厳しい。メキシコの国家的経済危機の慢性化によるインフレーションは現金収入の少ない村人の生活を脅かし，彼等は自らの貧困感を日々につのらせている。村人は自分達の貧しい経済状態を意識した時にマワセルという言葉を用いる。そしてマワセルと言う時には必ずツル (*ts'ul*) と言う反対概念が意識されている。マワセルという言葉の意味を問うと，貧しい者，哀れな者という意味のスペイン語 pobre やマヤ語 *otsil* という言葉にいい換えられる。しかしマワセルとツルが単に貧富関係だけを基準にしているわけではないことは，ツルという言葉の意味の広さとアイカル (*ayik'al*) という言葉の存在から推測される。アイカルとは「金持ち」という意味でツルと同義とする村人も多いが，アイカルには経済力にまかせて人を指図する傲慢な者というどちらかといえば否定的な意味が含まれている。これに対しツルは同じ「金持ち」であっても，同時に尊敬すべき人，上品な人という意味をもつ。例えば村の老人に敬意を込めて言及する時にツルという言葉が用いられるが，この場合その老人が経済的に豊かか否かは問題にされていない。ツルが上品だとされる理由は野良仕事をして手を汚すことがないからと説明される。つまりマセワルとツルが異なるのは生業上の違いが背景にあると考えられる。この意味ではマセワルは農民 (*koolnahal*) というべきであろう。

現在の村人の生活は決してS村の中だけでは完結しない。村のコナスポで購入できる日用品は限られており，祭礼用の酒，蠟燭，花火，農作業に用いる農薬や肥料，その他テレビやラジオ等の電化製品は町の商人から購入しなければならない。小学校はS村にあるがそれ以上の教育を受けるには村の外へ出なければならない。さらに急病や難産の場合にはトラックを頼んで町の医者の下に駆けつける。村人の宗教活動はチェマッシュの神父が村で催すミサなしには成立せず，灌漑農園での園芸も政府機関の技術者の指導なくしてはたちゆかない。このようにS村民は部分社会に生きる農民 (peasant) としての性格を強くもっており，自分

達の生活に不可欠な多くの制度や知識を村外に依存している。このような外部の専門職者がツルであり，マワセルである村人はツルへの従属性ゆえにツルを敬い慕わなければならないと考えているのであろう。

ところでマワセルは普通，貧民と同義で用いられることを既に述べたが，近年村人は村外に自分達と同様の多くの貧民がいることに気づき始めている。1986年6月から11月にかけてS村ではユカタン州政府による簡易水道敷設工事が行われた。この際，請負業者を通じてユカタン州ブクツォツ (Buctzotz) の町から人夫が来村した。彼等はマヤ語を話さなかったが，S村で雇用された村人と同様の建築作業に従事した。こうした土木作業員は村ではペオン (peón) と呼ばれ，S村の男性はたいていカンクンでペオンを経験している。カンクン労働は基本的には一週間単位の出稼ぎ形態をとり，主にホテルやショッピングセンターの建設工事に従事する。こうした現場ではユカタン地方のみならずメキシコ内陸部出身者も珍しくない。現金収入という点でペオンは魅力的だが，現場監督に指図され職務規定に拘束される生活は自主性の強い村での農作業とは好対照であり，自分の労働の結果 (ホテル等の建造物) が直接目分の物にならないことに虚しさを訴える者もある。つまりペオンとなることで村での日常生活以上に村人はツルへの従属を意識するのであり，農作業というコンテクストを離れてもなおマセワル意識は連続している。このように貧民という意味だけでなくツルへの従属者としてのマセワル意識は村の領域を越えて顕在化する傾向にあり，自分達と同じマセワルとみなすことのできる人間が，マエロか否か，ユカテコか否かにかかわらず多数知られるようになってきているのである。

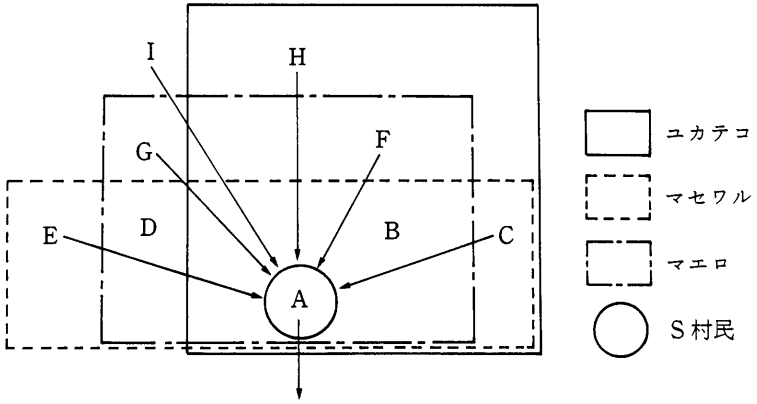
12) インディオ　村人がインディオという言葉を使用することは少ない。しかも使用されるにしても，特定の個人を対象にインディオと言われることはない。例えば子供達は三段梯子のような綾取りを作っは「これは隙間があってボロボロだからインディオのハンモックだ」と言って遊ぶ。また卵も野菜も入らない豆だけのスープは「インディオのスープ」

と説明される。このようにインディオとは悪人あるいは貧民，すなわち否定的な属性をもつ者の代名詞として考えられているが，自己のアイデンティティの表現としては決して用いられない。—そのような場合はマセワルと言われる。—端的に言ってインディオとは自分達以下の者であって自分達ではない。18才の少年は動詞を活用させずにスペイン語を話してみせ，これがインディオの話し方だと言う。彼によればインディオとは裸で家もなくひどい人間のことである。見たことがあるかと尋ねると，ないと答え「そんな風に学校で習ったんだ」と説明した。この例のようにS村におけるインディオ概念は明らかに村の外から入り込んだものであり，ユカタン州あるいはメキシコ全土，そして基本的にはラテン・アメリカの広域で認識されているインディオ像の受容にすぎない。各人は明確なインディオ・イメージをもっているが，S村にインディオがいるとは考えていない。

しかし村人が村の外へ出てツルやマヤ語を話さない者と係わりをもつ時に自分がそれらの人々に比べてよりインディオ的であることを意識せざるをえないことも確かである。町の人間がもつインディオのステレオタイプを知ってしまうと，マヤ語会話や農村出身の出自だけでなく，マヤ姓，肌の黒さが自分の相対的なインディオ性を表現していることに気づくのである。小学校付属の寄宿舎の校長はS村の隣村出身のバイリンガル教師であるが，寄宿舎制度についてためらいを込めながら「我々インディヘナ住民の教育機会の増大に貢献している」と語った。カンクンで働く時にはマヤ語を話さずユカタン州の出身を隠している若者もいる。つまり村の外では村人がインデォオ・アイデンティティを強いられる構造が存在しているのであり，各人はそれぞれの方法でこれに対処しなければならなくなっている。

以上12のアイデンティティの中から単なる属性の描写にすぎず集団性の認識に乏しいもの，使用状況がきわめて限定的なものを取り除くと1)

図2



村人，3) ユカテコ，9) マエロ，11) マセワル，12) インディオという五つのアイデンティティが残る。これらの関係を示したものが図2である。Aの部分をS村民とし，B～Iは村人が知っている人間のタイプである。具体例を以下に示す。

B：近隣集落の農民
C：ブクツォツから来た労働者
D：カンペチェ州，キンタナ・ロー州出身のマヤ語を話すカンクン労働者
E：マヤ語を話さないユカタン州外出身のカンクン労働者
F：バヤドリの商人，小学校教師，チェマッシュの神父，巡回医療団の看護婦，その他
G：人類学者
H：INIのエンジニア，バヤドリの医師
I：バヤドリのINI調整センターの所長

この図はS村民の視点からユカタン地方の住民をB～Iに相当するカテゴリーに分類できるという意味であり，同時にS村民がB～Iの人々に対

して抱く可能性のあるアイデンティティを示している。例えばS村人(A)はバヤドリの医師(H)とユカテコ・アイデンティティを共有しているが，自分がマエロであること，マセワルであること，S村民であることを両者の間の差異として意識化する可能性があることを示す。矢印の意味はS村民がインディオ・アイデンティティを顕在化させる可能性のある関係を示している。S村民は，BとDを除く人々に対して「インディオ的なる自分」の意識化を強いられる可能性があり，彼等自身は「自分達以下」の者に対してインディオ・イメージを投影しているのである[33]。

4 考 察

前節の図2ではユカテコ，マセワル，マエロ，村人というカテゴリーの相互関係を示したが，本節ではこれらのアイデンティティ共有者の集団性について考察をすすめたい。しかし議論はS村での調査資料から直接推論できる範囲を越えてしまう。そのため以下はユカタン地方全体を対象とした民族集団論の試論として提示されるものである。

出自と文化的アイデンティティを共有し相互行為を営んでいる集団として民族集団を定義するならば，前節での議論から第一にユカテコという集団を考えなければならない。もちろんユカテコとは第一義的にはユカタン州という明確な地域行政単位の成員という意味であり，ユカテコ・アイデンティティは地域的アイデンティティである。しかしそのアイデンティティを共有する人々—S村民も州都メリダの非マヤ語話者も—が，生活習慣や行動特性のある程度の共通性を意識してユカタンというレベルでの地理的出自を述べる以上，ユカテコ・アイデンティティは他のアイデンティティにもましてエスニック・アイデンティティと呼ぶに値するアイデンティティである。

これはメキシコという国家のレベルにおくと一層顕著である。例えば首都のメキシコ市では，ユカテコといえば独特のスペイン語イントネーショ

ン，体型に関するユーモラスなステレオ・タイプで知られる。またマヤ料理やマセワル料理とは呼ばれないがユカタン料理のレストランは多数存在する。つまりメキシコ国内においてユカテコは非ユカテコから特徴的な固有の文化を有する集団として認められているのである。またメリダ市民の間ではユカタン地方以外の出身者に対して (*wach*) という言葉が広く使用されており，ワチに対する自分達ユカテコという意識は非常に強い。

このようにユカタン地方のエスニシティを論じるにあたってユカテコを一つの民族集団 (ethnic group) としてとらえる立場をここで強調しておきたい。

次に，資源獲得のために活性化されるアイデンティティの共有単位という民族集団の性質を重視すれば，S村民に関するかぎり，村人 (*etkahal*) 以外のアイデンティティをこれに当てることはできない。S村民を民族集団とするにはあまりにも小規模だが，自分達の既得資源を保持するために成員権を限定し，新たな資源獲得のために団結のイデオロギーをもっているS村民は，他のアイデンティティで規定されるどの集団よりも機能的な利益集団である。しかも地域的出自が事実上共有され，きわめて均質な文化が保持されている以上，S村民という集団を小民族集団 (micro ethnic group) と呼ぶことが可能であろう。こうした性格はS村に限定されることではなく，少なくともエヒードでの農耕が生産活動の重要な地位を占めるユカタン地方のトウモロコシ生産地帯において，村内に政治的対立がない場合，同様に生じていると考えることができる。

マセワル・アイデンティティは生活の諸側面におけるツルへの従属性の強化と貧困感の増大によって近年強く保持されている。これは大局的にはS村をはじめとするユカタン地方の農村がメキシコ国家の資本主義体制に充分組み込まれた結果であるが，かつてスタベンハーゲン (R. Stavenhagen) が予想したように植民地時代に形成された民族関係が階級関係に再編されていく[34]という意味で，マセワルを経済的階級と考えることは早計であろう。なぜならばマセワルが自己の利益を追求するのに活性化させ

るのは，既に述べた通り自分の属する村へのアイデンティティであり，有限の政府資源を巡って近隣のマセワル集落との間で競合関係が発生する。集落のアイデンティティを越えた広範なマセワル・アイデンティティの共有者が利益追求のために集団性を発揮する可能性は，現状ではきわめて低い。

ホーキンスが述べたインディオ：ラディーノ反対像モデルのパラレルをあえてユカタン地方に求めるとすれば，インディオ：非インディオ関係よりもマセワル：ツル関係が最も近い。しかしマセワル，ツルの両語が共にマヤ語であるため，スペイン語モノリンガルのユカテコにとっては理解不能ではないにしろ，日常なじみの薄い言葉である。そのためユカタン地方のすべての住民がマセワル：ツル関係を明確な反対像として意識しているということはできない。

マセワル・アイデンティティ共有者間での相互行為が充分でないという理由からマセワルをひとつの民族集団と規定することは困難だが，各人のもつアイデンティティの強さと農業を基盤とする生活様式の共通性ゆえに，ユカテコの中の農民 (peasant) セクターとして準民族集団 (sub-ethnic group) と呼ぶことは可能だろう。

現在のマヤ語人口の特徴は表1にみる通りスペイン語とのバイリンガル比率の高さにある。ユカタン3州の全マヤ語話者のうち81.4%がバイリンガルと分類されている。これらのバイリンガル者はマヤ語で話しているかぎりマエロであるが，スペイン語モノリンガル者とスペイン語で話している時はマエロにはならない。もとよりバイリンガルには様々な程度があり，スペイン語の習熟度も個人差がはなはだしいが，多数のマエロが相手と状況に応じてマエロと非マエロを演じ分けており，客観的にマエロと識別できる人口は実は非常に可変的である。それでも自分にマヤ語知識があるかぎり，たとえマヤ語を話さなくてもマエロ・アイデンティティは保たれていると思われるが，近年マエロ・アイデンティティ自体が危機にさらされている。バイリンガル化に伴うスペイン語語彙の普及により，すでにスペ

イン語単語の混入なしにはマヤ語会話が成立しない状況が広まっており，「自分達のマヤ語は本物でない」という言葉はユカタン地方各地で聞かれるようになっている[35]。

前節でマエロの内部での多様な職業分化を例示したが，この多様性はもちろんユカテコ内部のそれには及ばないものである。しかしかつては疑いの余地がなかったマセワルとしてのマエロ像は，現在マエロ当事者の間で急速に現実性を失ってきている。

以上の議論からマエロの民族集団としての性格は，成員の文化的均質性の減少，アイデンティティそのものの衰弱という意味で不安定になりつつあると考えられ，マエロ集団は弱化した民族集団 (muted ethnic group) とでも呼びうる傾向を示している。

それでもなおマエロ集団を因習的にマヤ民族として語るならば，その成員の一部はすでにトウモロコシ畑を抜け出てユカタン地域社会の各層に進出を果たしており，各自が多様な文化適応を示していることを銘記すべきである。先スペイン期以来の伝統を今に伝える文化共有体としてのマヤ民族イメージすなわちインディオとしてのマヤ民族イメージは大いに修正されなければならない[36]。

5 結 論

本論文ではユカタン州東部のマヤ語話者集落，S 村での民族誌資料を基に，村人の様々なアイデンティティを掘り起こしながら，ユカタン地方の今日的なエスニシティ分析を行った。かつてはマヤ (マヤ語話者)，マセワル (農民)，メスティソ (民族衣装着用者) の各々のアイデンティティ所有者はほぼ完全に一致していたと考えられ，それゆえに彼等をインディヘナと分類することにある程度の妥当性もあった。しかし現在の変化的状況を考慮して S 村民自身の主観的な地理的，文化的アイデンティティを吟味してみると，以下の点が明らかになった。

1)洋服の一般化によるメスティソ・アイデンティティ共有者の集団性の衰退。
2)バイリンガルの進行によるマヤ・アイデンティティの弱化。
3)農村社会の自律性の減少と国民社会への統合強化によるマセワル・アイデンティティの維持，拡大。
4)利益追求の手段としての村人アイデンティティの活性化。
5)文化共有体としてのユカテコ・アイデンティティの顕在化。
6)自発的なものとして実体をもたず，強制されるものとしてのインディオ・アイデンティティ。

以上は従来のインディオ：非インディオ二極化還元論においては見落とされていた論点である。マヤ語の使用ゆえにインディヘナ住民と分類されるS村民は，強いられたインディオ・アイデンティティを甘受しているばかりではない。むしろ複雑化しつつある社会生活に対応して様々なアイデンティティを使い分けている人々である。今後はこれらのアイデンティティ共有者が集団としてどのような統合形態を生み出していくのかをS村を越えて観察，検討していく必要があると思われる。

・・・トラックが動き出すと長身の男は傍らの女達に挨拶をした。
“Kin bin, tak lunes. (さようなら。月曜日まで)”
女達は
“Ma'lob tun, nohoch ts'ul, tak lunes. (わかりました先生，月曜日まで。)”
と答えながら，ユカタン州内のそれぞれの村へ帰っていくバイリンガル教師達を乗せたトラックを見送った。

註

1) メキシコ湾岸からグアテマラ，ベリーセにかけて分布するマヤ系諸語の一つ，マヤ・カテコ語。本論文でのマヤ語はすべてこの意味で用いる。

2) 本論文では中米ユカタン半島メキシコ領内の三州，すなわちユカタン州，カンペチェ州，キンタナ・ロー州をその範囲とする。(図1ユカタン地方地図参照)

3) 1986年5月から1987年9月までの16カ月間。前半は第15回日墨交換留学制度，後半はメキシコ外務省文化協定制度による奨学金を得た。

4) Hawkins 1983

5) Redfield & Villa Rojas 1934

6) Redfield 1941

7) Redfield 1950

8) Hawkins 1983 : 300

9) Hawkins 1983 : 303

10) Redfield 1941 : 13

11) Colby & van den Berghe 1969 : vii

12) Press 1975

13) Thompson 1974

14) Bartolomé & Barabas 1977

15) Bricker 1981

16) Bricker 1981 : 166

17) Burns 1977

18) Hawkins 1984

19) Tax (ed.) 1952

20) Friedlander 1975 : 192-193

21) Barth 1969

22) Barth 1969 : 14

23) De Vos 1982 : 10-16

24) 本論文でのマヤ語表記は地名，文献から引用されたものを除いては，*Diccionario Maya Cordemex* 1980, Barrera Vasquez, ed.に従う。

25) ユカタン地方北西部，エネケン栽培地帯にある旧アシエンダ集落では，かつて荘園領主が住んだ村の中央と小作人が住んだ周辺部という空間的対立

が意識され，「広場の人々 (gente de la plaza)」(Bonfil Batalla 1962 : 108) や「中央の人々 (los del centro)」(Littlefield 1976 : 152) という言葉が使用されているという。しかしこのような中心居住者：周辺居住者の対立は専門職者：エヒード農民という対立でもあり，S村でのツル：マセワル関係に相当するものといえよう。

26) これと同じ現象がチャンコムでも生じている。(Goldkind 1966 : 330) S村民にとって幸運だったのは，大半の牛所有者が牛を売却してしまい，牧畜を続ける者は専用の土地を購入したので，エヒード内牧畜に終止符が打たれたことである。この点で牛の所有者が政治力を独占し，牧畜アシエンダさながらの状況を呈するにいたったチャンコム (Halperin 1975 : 124) とは対照的である。

27) Varguez Pasos 1981 : 75

28) 焦がしたトウガラシを一週間ほど水につけて辛味をぬく。これをコショウやオレガノ等の香辛料，ニンニクといっしょに細かくひいて黒いペースト状にする。これにトウモロコシの溶き汁と豚肉，鶏肉を入れ，アースオーブン (地面に掘った穴に焼け石を詰めたもの) で一晩蒸し焼きにして調理する。なお州都メリダでもこの料理を出すレストランは多い。

29) この場合外国人である日本人に対して「我々メキシコ人」という言葉が使われなかったことに注意が必要である。普通，ユカテコにとって「メキシコ」とは自分たちがその部分をなす上位概念ではなく，自分達と同じレベルで対立する同位概念である。

30) 植民地時代には民族衣装着用者でスペイン姓のものをメスティソ，マヤ姓の者をインディオとする区分があったが，両者が下層階級として一括されメスティソと呼ばれるようになったのは，メリダでは19世紀半ばとされている。(Hansen & Bastarrachea 1984 : 124)

31) Redfield 1950 : 39-40

32) 同様の傾向はチャムンコムにおいても認められる。(Elmendorf 1976 : 90, 137)

33) 図2では煩雑になるため示さなかったが，C.E.→ B.D., F.G.→ B.D., H.I.→

B.C.D.F.G.の関係でもインディオ・アイデンティティ顕在化の可能性がある。二者間の比較におけるインディオ・ステレオタイプへの相対的類似という点が鍵であり，その意味ではH.I.の者でも，例えばスペイン人に対して自分のインディオ性を意識するかもしれない。

34) Stavenhagen 1977

35) S村の教師は，本物のマヤ語はキンタナ・ロー州中部，シュカカル(X-cacal Guardia)あたりで話されているらしいと言う。しかし，一般にS村民のこれらの人々に関する知識は曖昧で，「かつて政府に反抗した悪人が南の方に住んでいる」という程度であり，カースト戦争の記憶は色褪せてしまっている。

36) しかし，これは現在のマヤ語話者の間に先スペイン期に遡る文化伝統が全く残存していないということを意味しない。S村での調査でもトウモロコシ耕作技術，農耕儀礼，村祭りのシンボリズム等では明らかな先スペイン期との連続性が認められた。こうした点については別稿で扱うことにする。ここで重要なのはこのように研究者が探し出して議論する客観的なマヤ・エスニシティと，本論文で扱ったマヤ語話者が日常的に係わる主観的なマヤ・エスニシティは必ずしも一致するものではないという点である。

参考文献

Barrera Vásquez, Alfredo, ed.

1980 *Diccionario Maya Cordemex.* Mérida : Ediciones Cordemex.

Barth, Fredrik

1969 "Introduction". in *Ethnic Group and Boundaries.* Fredrik Barth, ed., pp.9-38. Boston : Little, Brown

Bartolomé, Miguel Alberto, and Alicia Mabel Barabas

1977 *La Resistencia Maya : Relaciones Interétnicas en el Oriente de la Península de Yucatán.* Colección Científica 53. Mexico City : Instituto Nacional de Antropología e Historia.

Bonfil Baralla, Guillermo

1962 *Diagonóstico sobre el Hambre en Sudzal, Yucatán : Un Ensayo de Antropología Aplicada.* Mexico City : Instituto Nacional de Antropología e Historia.

Bricker, Victoria R.

1981 *The Indian Christ, the Indian King.* Austin : University of Texas Press.

Burns, Allan F.

1977 "The Caste War in the 1970's : Present-Day Accounts from Village Quintana Roo". in *Anthropology and History in Yucatan.* Grant D. Jones, ed., pp.259-274. Austin : University of Texas Press.

Colby, Benjamin N., and Pierre L. van den Berghe

1969 *Ixil Country : A Plural Society in Highland Guatemala.* Berkeley : University of California Press.

De Vos, George A.

1982 "Ethnic Pluralism : Conflict and Accomodation." in *Ethnic Identity : Cultural Continuities and Change.* George De Vos and

Lola Romanucci-Ross, eds., pp.5-41. Chicago: University of Chicago Press.

Elmendorf, Mary L.

1976 *Nine Mayan Women: A Village Faces Change.* New York: John Wiley & Sons.

Friedlander, Judith

1975 *Being Indian in Hueyapan: A Study of Forced Identity in Contemporary Mexico.* New York: St. Martin's Press.

Goldkind, Victor

1966 "Class Conflict and Cacique in Chan Kom". *Southwestern Journal of Anthropology* 22: 325-345

Halperin, Rhoda H.

1975 *Administración Agraria y Trabajo: Un Caso de la Economía Política Mexicana.* Serie de Antropología Social 36. Mexico City: Instituto Nacional Indigenista.

Hansen, Asael T., and Juan R. Bastarrachea M.

1984 *Mérida: Su Transformación de Capital Colonial a Naciente Metrópoli en 1935.* Mexico City: Instituto Nacional de Antropología e Historia.

Hawkins, John

1983 "Robert Redfield's Culture Concept and Mesoamerican Anthropology". in *Heritage of Conquest: Thirty Years Later.* Carl Kendall, John Hawkins, and Laurel Bossen, eds., pp.299-336. Albuquerque: University of New Mexico Press.

1984 *Inverse Images: The Meaning of Culture, Ethnicity and Family in Postcolonial Guatemala.* Albuquerque: University of New Mexico Press.

Littlefield, Alice

1976 *La Industria de los Hamacas en Yucatán, México: Un Ensayo de*

la Antropología Económica. Serie de Antropología Social 52. Mexico City: Instituto Nacional Indigenista.

Press, Irwin

1975 *Tradition and Adaptation: Life in a Modern Yucatec Maya Village.* Westport: Greenwood Press.

Redfield, Robert

1941 *The Folk Culture of Yucatan.* Chicago: University of Chicago Press.

1950 *A Village that Chose Progress: Chan Kom Revisited.* Chicago: University of Chicago Press.

Redfield, Robert, and Alfonso Villa Rojas

1934 *Chan Kom: A Maya Village.* Publication 448. Washington D.C.: Carnegie Institution of Washington.

Secretaría de Programación y Presupuesto

1982a *X Censo General de Población y Vivienda, 1980 Estado de Campeche.* Vol I-II, Tomo 4. Mexico City.

1982b *X Censo General de Población y Vivienda, 1980 Estado de Quintana Roo.* Vol.I-II, Tomo 23. Mexico City.

1983 *X Conso General de Población y Vivienda, 1980 Estado de Yucatán.* Vol.I-II, Tomo 31. Mexico City.

Stavenhagen, Rodolfo

1977 *Clases, Colonialismo y Aculturación: Ensayo sobre un Sistema de Relaciones Interétnicas en Mesoamérica.* Cuaderno del Seminario de Integración Social Guatemalteca 19. Guatemala City: Ministerio de Educación. (originally appeared in *América Latina* año 6, No.4. 1963)

Tax, Sol, ed.

1952 *Heritage of Conquest: The Ethnology of Middle America.* Glencoe: Free Press.

Thompson, Richard A.

1974 *The Winds of Tomorrow : Social Change in a Maya Town.* Chicago : University of Chicago Press.

Varguez Pasos, Luis A.

1981 "La Milpa y los Milperos del 'Oriente' de Yucatán". in *La Milpa entre los Mayas de Yucatán.* Luis A. Varguez Pasos, ed., pp.74-114 Mérida : Ediciones de la Universidad de Yucatán.